

國學院大學學術情報リポジトリ

「たまプラーザ宇宙の学校2013」報告：
新たな一步に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴崎, 和夫, 堀江, 紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001277

「たまプラーザ宇宙の学校 2013」報告

—新たな一歩に—

柴崎 和夫 堀江 紀子

【キーワード】

理科教室 親子共同学習 地域貢献

1. はじめに

「たまプラーザ宇宙の学校 2013」の定例報告である。「宇宙の学校」を人間開発学部の課外で実施する教育カリキュラムとしたい、と密かに考えてきたが、4年目の今年を終えてほぼそのような形になったと考える。昨年度からは学生主体で実施することにし、まず責任者（リーダー）を学生間の話し合いで決定してもらった。後は、リーダーのもとでプログラムの決定、人員配置、事前準備、当日の運営等々を立案し、原則全て学生に任せている。教員はアドバイザー役に徹している。昨年の経験もあり、今年は安心して学生に任せることができた。名実ともに、「宇宙の学校」が人間開発学部主体の活動となったといえる。以下に、今年の「宇宙の学校」の状況を報告する。資料としてまとめを最後に記すが、この報告は学生の『振り返り』を中心に記述する。なおこれまでの経緯については、昨年までの報告（柴崎・堀江『人間開発学研究第2号』2011、堀江・柴崎『人間開発学研究第3号』2012、柴崎・堀江『人間開発学研究第4号』2013）を参照してほしい。

2. 「宇宙の学校」4年目

今年度は初心に返ることを考えた。前年度までの報告でも述べたことだが、この「宇宙の学校」実施の狙いの一つには、手助けに入る学生スタッフたちが自然や自然現象を、原理から論理的に理解して児童に的確に伝えることができ、さらに、自ら理科の教材を考え、制作することができるようになることを目指す、ことが含まれている（柴崎・堀江『人間開発学研究第2号』2011、柴崎・堀江『人間開発学研究第4号』2013）。しかし、「宇宙の学校」を企画して立ち上げたKU-MAの大きな目的は、『宇宙教育』ともいえるべきもので、「宇宙の学校」参加をきっかけに親子（家族）が家庭で様々な実験なり工作を行ってもらい、良好な親子関係のきっかけ作りにしたいということであった。家庭を巻き込んだ学習環境作りの手伝いが、最重要課題のひとつとなっている。そこで、今年度の「たまプラーザ宇宙の学校2013」ではこの点についても課題とし、現場では親子共同で参加できるような働きかけを考えてもらうことにした。この点は、学生の代表が決まり、定例で集まる場においても今年の課題として学生に伝えた。

今年の目標を実現するためと、また学生と私達自身の負担を減らすため、今年は午前の部である小学校1、2年生の児童とその保護者だけを対象とすることにした。昨年は実施した3、4年生の児童だけが参加する午後の部は、学生スタッフに対する教育的効果が大変大きかったことは事実である。けれども、今年は前述の観点から午後の部は中止することとし、午前の部の運営に集中することとした。

今年度の参加者応募状況は、昨年と大きな違いはなく、午前の部（1、2年生の児童と保護者）50組募集に対し、85組の応募があった。今年度は手助けしてくれる学生スタッフの数が昨年に比して多かったため、最終的には60組を選んだ。昨年からの傾向だが、「宇宙の学校」の周知を青葉区の広報を主としたことで、参加者が住む地域や通う小学校も多様になった。青葉区が中心だが都筑区、川崎市の高津区、麻生区、そして世田谷在住の小学生の参加もあった。また、昨年同様私立小学校からの参加者もいた。

3. 「たまプラーザ宇宙の学校 2013」の企画について

今年度も第一回目は体育館で開催して、「熱気球」を飛ばす、ことが決定していた。体育館の使用は限られているためと、最初に参加者同士が共同作業を実施し、共同作業の達成感を通じて仲間意識を持ってもらい、以後のスクーリングでも皆が当事者として参加してもらうことを狙ったものである。なお初回の開校式では、柴崎が「宇宙の学校」の目的について、『宇宙』と銘打っているが、地球上の生物を含め宇宙の一員として地球のすべて（ヒトも）を大切に想う心と、自然を観察してその背後にある原理を学ぼうとする心（興味）を養ってほしいこと、家庭でも親子で実験や観察をしてほしい、ことを伝えた。

昨年は悩んだ2回目以降のスクーリングについても、比較的スムーズに決定した。体育館でのスクーリングはほぼ決まってしまうので、他の3回に何を実施するかである。「たまプラーザ宇宙の学校」のテーマが『飛ぶ、飛ばす』こと、である点は今年度も変更なしであった。さらに、人気の企画である『フィルムケース・ロケット』実施には体育館を使用するのが望ましいということで、第3回目の体育館での企画もほぼ自動的に決定した。体育館で『フィルムケース・ロケット』と同時に実施するのは『飛ぶ種』であることも、昨年と同じであった。残りの3回の企画も比較的スムーズに決定した（後述）。昨年試みた、紙飛行機作りはやめることになった。完全に新規の企画は無かったが、昨年の経験を踏まえた企画決定であった。

今年のもう一つ大きな試みは、『宇宙の学校』本番では無いが、ペットボトル・ロケット（水ロケット）を飛ばす試みを実施したいということであった。これは著者たちが暖めてきた企画で、『宇宙の学校』で実施するには場所（グラウンドが必要）や手間の問題で難しいが、単発のイベントとして実施すること、将来的にはロケットの飛翔大会を企画したいという思いがあったからである。道具はこれまでにそろえていたので、学生達は空き時間に集まってロケット制作、発射機構の組み立てを行った。試射を繰り返したが、失敗と成功を繰り返す、試行錯誤の連続となり、

予想以上に苦戦することになった。特に発射機構がうまく働かないことがあり、原因究明に多くの時間がかかった。学生達は辛抱強く取り組み、近藤教授からの効果的なアドバイスなどもあり、最終的には何とか問題点の洗い出しに成功して実施可能な状態までもっていくことができた。企画としては、中庭を利用して夏のオープンキャンパス期間にロケット打ち上げを実行することができた。これについては次年度以降、より具体的な企画を練る方向で考えている。

講師役を学生に任せることは昨年同様で、3年生にリーダー役を割り振った後は、学生達がメーリングリストを利用して、連絡、運営を行った。また、定期的に会議を開催し、参加スタッフは、1年生も含め、事前に工作内容を把握して実施予定の工作・実験は必ずやってみることにしていた。今年はこの点は皆が協力的であった。

今年度も、企画決定、講師役、学生スタッフの役割分担、すべてをリーダーに一任したため、リーダーの負担も大きかった。今年度は、近隣の学童保育ボランティア団体からも企画実施の要請があり、大学外での活動も初めて行うことになった。これも次年度以降、さらに発展させたいと、特に学生達が、考えている。

3.1 学生達の反応

今年は「子供支援学科」が開設され、1年生のスタッフが特に多く参加してくれた。昨年同様リーダー役の学生はかなり重圧を感じていたが、1年生は事前学習にも良く参加してくれた。ただ、直前の準備で必要な、機材の移動、整理、準備、については参加率が極端に低く、リーダーなど一部の学生だけが奮闘していた点は反省点で、次年度への課題である。

今年度は1年生からのアンケートが多かったので、主に1年生を中心に記述する。が、まずは2、3年生の、経験者として振り返ったことを簡単に（抜粋で）述べる。

3.1.1 3年生

間近に迫った教員採用試験という気持ちもあるのか、と感じる経験者の振り返りである。

◆こどもたちは元気で、積極的に前に出てきてくれるというように思っていたけれど、それは学校のクラスなどで、慣れて自分のポジションが確立されている所でないと難しいのだと、宇宙の学校で感じた。・・・グループや学生を固定するならば、毎回のはじめはゲームなどして、距離を近付けるのも良いのではと思った。

◆・・・また、今回は三年生としての学生スタッフであり、二年生の段階で小学校へボランティアに行くなどして、ほかの小学生と接する経験を生かし、少し余裕を持って対応することができました。・・・保護者への対応については未だに不十分であり・・・。今回の宇宙の学校は、自身が最上級生ということで二年生や一年生に指示を出していくことも求められ、チームワークの大切さを実感しました。

- ◆・・・また、保護者の子どもに対する対応やコミュニケーションの仕方など、多くの学びや教師としての指導のイメージを持つこともできた。
- ◆・・・実験や制作の手順を説明するときに、どういう言葉ならわかりやすく伝わるかについて考えることができた。また、騒いでいる子をどう集中させるか、こちらに意識を向けさせるかについても、自分なりに工夫できた。・・・
- ◆・・・私が思っていたよりも1、2年生はずっと子どもでずっと大人なのだと感じました。・・・また、子ども達は実に多様な視点を持っているということも知りました。・・・
- ◆・・・私たちの成長です。最初の内は、なにをするのか、なにができるのか戸惑いがあった私たち。しかし、回を重ねる毎に落ち着きや、活動に取り組む姿勢など、目に見えて分かりました。自分にとって、この宇宙の学校での経験は、大切な身体の一部となりました。・・・
- ◆・・・子どもたちには少し難しい問いかけでも、保護者にそれを考えてもらおうという形をとれば保護者も参加できる活動になるかなと思いました。・・・私自身は、何をめあてとしてプログラム（活動）をするかということを、考えるようにしました。リーダーとして、スタッフをまとめたり、活動の進行をするにあたって、目標を立てることでそこから各班にやってほしいことが見えていくという流れがあることが分かりました。・・・

3.1.2 2年生

次年度のリーダー学年である。

- ◆もっと宇宙に関わった題材もやりたい。外でやる回をもうけたい。・・・午後の三、四年生の部があった時は、保護者がいる時といない時の対応の違いを感じたり、午前の部での失敗や改善点を午後の部ですぐに活かすことができた。・・・やはり三、四年の部を設けた方が良いと思った。

3.1.3 1年生

今年度は多くの1年生が参加してくれた。昨年までもそうなのだが、参加動機に「理科が苦手ですそれを克服する一助にしたい」、というものが結構目立つ。数が多いので、一部のみ紹介させてもらうことにする。

- ◆「先生」なのか「お姉さん」なのかどちらが良いのか迷いました。・・・ずっと緊張しっぱなしで、説明を任された不安を感じたり、うまくいかない時に落ち込んだ顔をしていたりしてしまっていたので、笑顔が消えて表情がこわばることがたくさんありました。・・・そんな時、先輩が「大丈夫だよ」とはげまして下さったので、何度も救われました。・・・
- ◆・・・こういった声がけて、子どものことをよくわかっている親だからこそその声がけだと思いました。自分が教師になった時に、どれだけ一人一人の子に対して理解できるのかって

というのが大切なのかもしれないと思いました。・・・

- ◆・・・低学年の子どもたちでも理解しやすい内容だったので、理科の苦手な私でもきちんと一つ一つ理解できました。・・・思ったよりも子どもたちがおとなしい子が多かったことです。・・・私自身が参加する前では、あまり子どもと話ができてなくて話題性に欠けていたり、積極的に話しかけられませんでした。スクーリングを経験していくことでコミュニケーション能力が身につく、自分から子どもたちに話しかけたり、どんな子とでも関わられるようになりました。・・・
- ◆・・・子ども達の思考の多さに驚きました。どのようにしたらいいかと子ども達に問うと沢山手があがって様々な答えが返ってきました。・・・接し方はしっかりと子どもの顔の位置、目線を同じにして話すことが大事だなと思いました。・・・
- ◆印象に残っているのは、初めから最後までずっとお母さんにつきっきりだった子が、話しかけているうちにだんだんと自分で作業に向かえるようになってきて、最終的にはお母さんから離れて友達とも楽しそうにしていたのがうれしかった。・・・
- ◆・・・保護者の方々は子どもにまかせっきりであり参加してこないのかなと考えていました。・・・だんだんと親子でいっしょにやってくれるという組が多くなったので、説明のしかたやお願いのしかた、子どもへの説明のしかたなどにたくさん学ぶことができました。・・・小学生低学年でも意外といろいろなことを知っていて、できることも多いようだったので、どこまで教えていいのか、または考えさせるのか、どこまで手伝っていいのかまかせせるか、知らなければいけないのだと思いました。・・・
- ◆・・・私自身としては、参加する前は、子どもたちだけでなく、保護者の方の前でも話すことが少し不安でした。・・・熱心で意見の強い親が多いので問いつめられたらどうすれば、と少し思っていました。しかし、参加してみて、元気な子どもたちも多くて接しやすく、保護者の方に質問されることもありましたが、冷静に対応できた自分がいて、少しだけ子どもと親と接することに自信がついたように思います。・・・
- ◆先輩のやり方を参考にしながら。私自身もだいぶ変わったと思います。子どもたちの目線に合わせて話したり、わかりやすい言葉づかいを考えながら話したりと、工夫できるようになってきた気がします。また、自分から笑顔で積極的に話しかけることをするだけでも、少しずつ子どもたちが心を開いてくれているなど感じました。・・・
- ◆・・・本当に様々な子供がいるなと思いました。・・・話の進め方や子供への接し方、バランスが想像以上に難しくて驚きました。そして私自身参加する前と後でとても変わったと自分で思います。子供への接し方が本当にわからなくて、どのように話せばいいかなど、そのような基本的なことから不安だったのですが、宇宙の学校を通して、その不安が少しとけました。それと同時に、自分への課題も数多く発見できたので、私にとってとてもいい刺激になりました。

- ◆・・・アドバイスの出し方も全部教えるのではなく、「どうしたらいいのかな？」と問いかけてみたりと子どもに考えさせるようにしなければならなかったのが難しかった。・・・見本通りに子ども達に作らせるのではなくて、子ども達の思ったように自由に作らせることが一番子ども達は考えているなと思った。・・・その後保護者の方が「宇宙の学校に来てから、宇宙について興味を持ったみたいで、“うちゅう”の書き方（原文ママ）を聞かれたときびっくりしました」と言われたので、宇宙の学校に通ったことで、少しでも宇宙に興味を持ってくれて嬉しかった。
- ◆・・・一番変わったことは、子どもが何を求めているのか分かるようになってきたことです。・・・また、子ども一人一人できることとか、速度とかの違いを、気長に待てるようになりました。・・・番外へんでやった空気砲実演です。初めてやったリーダーは、相当にほろにがいもので、色々と失敗をしてしまいましたが、先輩たちのフォローのおかげで、あれはあれで次に生かせることはあったので、良かったのかなと思うようにしました。・・・

3年生の余裕と、1年生の必死さがうかがえる振り返りである。また、失敗や、先輩とのふれあいが、学生を大きく成長させる糧であることを、毎年のことだが、改めて感じることができる。

3.2 プログラムについて

「たまプラーザ宇宙の学校2013」の概要

- 1) 広報：青葉区広報4月号、大学HP、KU-MAの会HP、地域情報誌ビタママTimes
宣伝：FMサルース「AOBAくるん♪キャンパス」5/15出演（リーダー、副リーダー）
- 2) 応募状況：午前の部（小学校1、2年生＋保護者）85組（抽選で60組に）
学年の内訳：午前の部 1年33組、2年27組
- 3) 企画実施状況（会場は410教室、ないしは体育館）
 - 5月26日（日）：開校式と「熱気球」制作（体育館で実施）
※家庭学習用テキスト配布
 - 6月23日（日）：空気砲、ふわふわ風
 - 7月21日（日）：種の模型制作、フィルムケース・ロケット（体育館で実施）
 - 9月29日（日）：傘袋ロケット、ふわふわ飛行機
 - 10月20日（日）：閉校式と月と地球の大きさ比べ、葉脈標本のしおり
レポート発表

以下の表に各回の参加者状況等をまとめた。

表 1 各回の実施状況

		第 1 回 5/26 開校式	第 2 回 6/23	第 3 回 7/21	第 4 回 9/29	第 5 回 10/20 閉校式
開催場所		体育館アリーナ	410教室	体育館アリーナ	410教室	410教室
ミニ講演		気球の話	空気砲の実験演示	飛ぶ種の話		月と地球の大きさ比べ
制作 1		熱気球	ペットボトル空気砲	種の模型を作ろう	傘袋ロケット	葉脈標本のしおり
制作 2			ふわふわ凧	フィルムケース ロケット	ふわふわ飛行機	レポート発表
数	参加組数	58	56	47	52	44
	学生スタッフ	38	21	15	25	28

4) 以上の他に、下記のような企画を「たまプラーザ宇宙の学校」として実施した

番外編：6/19（水）【新石川小はまっ子出張「たまプラーザ宇宙の学校」】

制作	空気砲の実演 ペットボトル空気砲をつくろう
場所	新石川小体育館
時間	15：15 - 16：30
参加者	児童 117 人
スタッフ	教員 1、学生 12

番外編：7/21（日）【オープンキャンパス同時開催夏の小さな科学まつりにおける「たまプラーザ宇宙の学校」】

制作	ペットボトルロケットを飛ばそう
場所	中庭
時間	13：30 - 15：00
参加者	子ども 32 人
スタッフ	教員 2、学生 11

番外編：10/27（日）【第5回共育フェスティバルにおける「たまプラーザ宇宙の学校」】

制作	空気砲の実演 ペットボトル空気砲をつくろう
場所	410 教室
時間	11：00 - 12：00、14：00 - 15：00
参加者	午前：子ども 29 人、午後：子ども 40 人
スタッフ	教員 2、学生 10

昨年同様「たまプラーザ宇宙の学校 2013」開催の様子は、人間開発学部のホームページ²⁾とKU-MAのホームページ¹⁾で確認できる。最終回に参加児童が発表した、家庭で実施した実験・工作のレポートも、KU-MAのホームページ¹⁾に、これまでの分も含めすべてが掲載されている。

4. 「たまプラーザ宇宙の学校 2013」開催結果の評価について

今年度も参加者に、アンケートをお願いした。簡単に概要だけ述べる。

4.1 参加者対象アンケート

各回のプログラムと参加者数は表1の通りである。プログラムの内容については、事前に知らせていない。おおむね出席率はかなり良いが、小学校が夏休みに入った7月と10月の最終回は、例年と同様欠席者が目立つ。特に最終回は小学生に発表させる機会であるので、毎年のものであるが、対策を考えたい。

保護者対象アンケート：回答数45

問1) お子さんは何年生ですか？

1年生	26
2年生	19

問2) 開催情報の入手先

インターネット 6、青葉区広報 32、その他 3

問3) 応募の動機

記述式の複数回答で答えてもらった。昨年度までと基本的には変わらない。子供への期待と親の期待（理科に興味を持ってほしい）である。

問4) 参加回数

3回	2
4回	8
5回	35

問5・6) 最も気に入ったプログラム（複数回答）

保護者には「熱気球」がダントツの一位人気である。子どもたちには「フィルムケースロケット」、「葉脈標本」そして「空気砲」がほぼ同様の人気の高さである。

問7) 自宅で工作・実験をいくつしましたか？

1つ 17人、 2つ 13人、 3つ 6人、 4つ 1人、 5つ以上 4人

家庭での工作・実験は「宇宙の学校」の意図するところでもある。1つまたは2つ実施したという回答が全体の約7割を占めたが、5つ以上という答えもある。

問8)「宇宙の学校」に参加して良かったですか？

保護者：「とても良かった」37人、「まあまあ良かった」7人

子供：「とても良かった」40人、「まあまあ良かった」4人

保護者では「少し期待はずれだった」と答えた方が1名あった。

問9) 来年も参加したいと思いますか？

これも昨年度までと同様、来年も参加したいと回答してくれた方が9割以上だが、「思わない」と答えた方も少数（2名）いることは忘れてはならない。

問10) 参加した感想

参加した感想、次回以降のご要望について教えてください

- ・広い場所が必要な、大がかりな実験と家庭で、身の回りのものを使って出来る実験（台所にあるものを使った実験など）のバランスがとれたラインナップがいい。傘袋はいつでも町で手に入るものより分厚かったり、発泡スチロール板は手に入らなかったり、材料の再現が難しいのが少し残念でした。
- ・学生のお兄さんお姉さんに親切に接していただいて本当にありがとうございました。また、妹も一緒に参加させていただいてありがとうございました。とても楽しかったです。
- ・息子が身近な事象に対して興味を持つようになりました。ありがとうございました。
- ・子供は工作がそれぞれ楽しかったようです。
- ・わかりやすく良かったです。
- ・とくになし。
- ・日頃行う事が出来ない（思いつかない）実験をして頂き、親子共に大満足でした。
- ・二回目以降も参加したいです。
- ・とても有意義でした。1年生、2年生で理解力に差があるので、学年別にしてもよいと思います。
- ・さいごのじっけんで、はっぴょうものしくでき、いろいろまんで良かったです。
- ・日曜日の午前中の開催でしたので良かったです。グループ分けの人数も良かったです。
- ・本人が楽しそうだったので、良かったと思います。
- ・わたしは、このうちゅうの学校に来て、科学にとてもきょうみがもてました。ありがとうございました。
- ・学生の方が子供に対して親切に対応される姿勢が良かったです。
- ・なぜそうなるのか、説明があっても良いのでは？
- ・毎月一回の学校を親子で楽しみにしておりました。出来るなら来年度も参加させたいと思います。本当にありがございました。
- ・高学年向けにもやって欲しい
- ・なぜこの実験を行うかという説明が足りない。一般の工作教室との違いがわからない。宇宙への勉強をできると思っていたが、工作教室の色が強かった

- ・野外があっても良かった。
- ・とても楽しかったです。学生の皆さんのサポートもよく子供も良かったといっていました。ありがとうございました！
- ・グループを時々変えても良いかと思いました。
- ・「宇宙の学校」なので、もう少し「宇宙」っぽいのがあったらもっと良かったです。学生さん達がとても一生懸命にやってくださっていて、とても感動しました。準備等たいへんだったと思いますが、ありがとうございました
- ・ありがとうございました
- ・子供が家で母親にいろいろと自慢して話しているので、本当に楽しいんだと思います。大学生の皆さんは親を気にせず、どんどん子供とからんだりしかったりして頂いても結構です。有難うございました。
- ・楽しかったです。ありがとうございます。宇宙に関する内容がもう少しあると更に良いです。
- ・実験、工作が多かったので、楽しかったです。これを機に、色んなことに興味を持ってくれたらと思います。ありがとうございました。
- ・ところどころで難しいところがあり、そこでつまづくとなかなか先に進めなくなり、前を向かせる事に苦労しました。
- ・毎回楽しく参加させていただきました。有難うございました。
- ・親子でこういった時間を共有するのが良かったです。回数もちょうど良かったです。
- ・真夏に冷房のない体育館は暑さが厳しかったため、時期を考慮して頂けたらと思います。どうもありがとうございました。
- ・あっという間に時間が過ぎてしまうほど楽しかったです。
- ・とても楽しく参加させていただきました。全10回位通いたい位楽しかったです。晴れた日は外での実験もあると楽しさが増します。有難うございました。
- ・工作をもっと作りたい
- ・3年生を対象とした宇宙の学校があれば是非参加したいです。
- ・とても良かったので、中学年、高学年でもやってほしいです。
- ・たのしかった。

4.2 まとめ ― 次年度に向けての反省と課題 ―

運営については、学生に任せる形が定着したと考えている。また、次年度の学生スタッフについては、今年度中（1月中）に募集をして、4月早期から動き出す形をとることにした。次年度のリーダー役も既に決定している。

企画の上での反省点として、今年度は、最終回でのレポート発表者が参加者の半数程度と、全

く予想外の少なさであった点がある。最終回の一回前に、発表が「あくまで任意である」点を強調しすぎたかもしれない。昨年度、参加者が少なかったので、発表が重圧になっているのではと考えたからではあるが、これは意外な結果である。欠席者が多かったことも変わらず、また次年度への宿題となった。

また3、4年生対象の午後の部を、学生の意向が強くあり、実施することになっている。宇宙の学校開催の目的の一つである、『家庭を巻き込んでの学習』意欲を高めること、は保護者と小学生の参加を求める午前の部で試みることにし、午後は学生自身の教師としての成長を目指す場としたい。また、次年度は午後の実験室を使うことも検討する。

さらに、ペットボトル・ロケットを少し大々的に実施する企画を考えると、「宇宙の学校」学外編の拡大も考えていくことになるだろう。一層、学生の意欲に期待したい。

5. おわりに

第4回目の「たまプラーザ宇宙の学校」の開催までの経緯、実施状況、成果、反省点と課題を報告した。いつも通りであるが、さらなる発展を期して、緊張感を失わずに、新しいことに挑戦することを忘れずに次年度も実施していきたい。

最後に、今回のプログラムを成功裏に実施出来たのは、KU-MAの的川会長、事務局の田口氏、学生スタッフ諸氏（下記参照）の献身的な努力の賜であった。特に、田口さんには初回実施の時に、地方へ出発直前に不足機材を運んでいただき、心から感謝する次第である。

平成25年度学生スタッフ（下線は前年度経験者）

1年 安藤友希、安藤夏子、池田実礼、石倉紗穂、今井佳奈、小原絵里香、木下初奈、草場稚菜、小石川窓香、酒井美香、篠崎洸平、清水穂香、白井菜摘、鈴木和弥、高瀬あすか、高橋由起、中田喜次、長尾莉沙、長崎遥、名和明佳里、根岸佑妃、長谷川祐子、福田麻美子、松島沙也伽、三吉野はるか、村上真来、本倉藍、吉山幸輔

2年 宇津川晶子、梅田綾乃、佐々木雅人、中村崇広、丸山雄史

3年 加茂真裕子、黒田真以、佐藤亜紀、鈴木美祐、小林詩織、坂田望美、増田紘也、佐藤洋平、佐藤篤哉、平田夏美

この他に、番外編で手助けしてもらった学生さんがいます。

参考

- 1) KU-MA ホームページ ; URL <http://www.ku-ma.or.jp/>
- 2) 國學院大學人間開発学部 ホームページ ; URL <http://www.kokugakuin.ac.jp/human/>
- 3) 柴崎、堀江『人間開発学研究第2号』2011
- 4) 堀江、柴崎『人間開発学研究第3号』2012
- 5) 柴崎、堀江『人間開発学研究第4号』2013

（しばさきかずお 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）

（ほりえのりこ 國學院大學人間開発学部資料室助手）